

グローバリゼーションとは何か

伊豫谷登士翁

現代という時代を表現する言葉としての「グローバリゼーション」は、企業のキャッチコピーから学術用語まで、幅広い分野で多義的に使われてきた。巨大企業の世界的な統合化や一日数兆ドルの金融取引、民営化や規制緩和という新自由主義の政治、法のグローバル化、グローバル・カルチャーと共通経験の共有、グローバル・メディアの支配、あるいは反グローバリズムの運動など、トランス・ナショナルな事象が、地球上のさまざまな局面を特徴づけている。あらゆる課題がグローバルな課題として現れ、国家を単位としては解決不可能となってきたと言われている。しかしグローバリゼーションは、たんに現代という時代を読み解く言葉ではない。近代と呼ばれてきた時代が抱え込んできたさまざまな課題を明らかにする言葉としても用いられてきている。二度の世界戦争や地球的規模での環境汚染は、近代世界の帰結であり、人類の普遍的な真理と捉えてきた自由や民主主義の暴力性が明らかにされてきた。いま再び、植民地支配を含めた歴史認識やファシズムを含めた世界体制の問題性が問い直されようとしている。現代をグローバリゼーションの時代というのは、いわゆる先進諸国の独断であり、多くの地域にとって、植民地化されたときからグローバルな枠組みのなかにおかれてきた、ということもできる。ここでは、現代という時代が突きつけてきた課題と、近代という時代が抱え込んできた課題を見据えつつ、いま私たちが直面する知の転換が何を問題にしようとしているのか考えてみたい。

グローバリゼーションを知るということは、これまでの知識に新しくひとつの知識を付け加えるというものではない。グローバリゼーションをキーワードとする研究領域は、国民国家の学として体系化された諸分野に対する批判であり、特定の課題を明らかにするというものではない。グローバリゼーション研究は、ナショナルな領域や枠組みを前提としてきた思考のあり方を批判的に見直し、国家やネーションを所与とする従来の社会科学や思想の枠組みを組み替える試みでもある。歴史は、つねに現代と過去との対話であり、「いま」という時代の制約を受け、たえず書き直されてきた。グローバリゼーションの時代と言われる現代にあって、再び、歴史の書き直しは、様々な地域で始まっている。悲惨な世界戦争は過去の物語ではない。半世紀以上を経たいま、あの戦争、そしていまある世界の紛争を、近代世界の逸脱ではなく、その必然的な帰結として理解することが必要である。グローバリゼーションを知るということは、近代という時代の知の問い直しである。